

苺パニック3

I c h i g o & S o u

風

fuu

termity



エタニティ文庫

目次

苺パニック 3
～クリスマス編～

書き下ろし番外編
もっけ
勿怪の幸い 337

苺パニック 3

～クリスマス編～

プロローグ（中身のまるでない報告）
 〔執事頭 吉田善一〕

「吉田さん」

呼び止められ、善一はゆっくりと振り返った。

所用で、朝から遠方に出かけていた屋敷のスタッフだ。

「ああ、君か。どうやら間に合ったようだね。まだまだ料理も運ばれてくるから、クリスマスイブのパーティーを存分に楽しみなさい」

「はい。これからいただきます。それにしても、美しい女性たちがたくさんいらしていて驚きました」

善一はフロアを見回して、頷いた。

大奥様が招いた女性たちのことだろう。孫である爽様の花嫁にと、大奥様のお眼鏡に適った女性ばかりが集められている。

この屋敷の男性スタッフは、美しい女性たちの参加を喜んでいるが……

スタッフ全員参加のパーティーを催すとお決めになった当の日本人、爽様は残念なこ

とにこの場にいらっしやらない。ともあれ女性の方々は、主が不在であってもまあ楽しんでおられるようだ。

実は、今宵爽様は避難場所として使っていたワンルームマンションで、『イチゴヨーグルトの君』とふたりきりで過ごしているのだ。長らく女性とは縁がなかった主に、ずっと気を揉んでいたのだが、ようやく爽様にも春が訪れたようだ。それは大変喜ばしいことなのだが……まだ私はその『イチゴヨーグルトの君』とお会いしたことがない……

「吉田さん、これを。たいしたものではないんですが」

スタッフから差し出されたものを受け取り、善一は相好を崩した。

「これはこれ……ありがとうございます」

「いえ。私のほうこそ、プレゼントをありがとうございます。吉田さんは毎年、欲しいなと思っていたものをくださるので、驚いてしまいますよ」

「そうか、ならばよかった」

すでにプレゼントは両手に抱えきれないほど受け取った。まあ、善一は毎年スタッフ全員にプレゼントを贈っているの、みな礼儀としてくれるのだろうか……。どのプレゼントにも真摯な思いが込められているように感じる。

善一もパーティーの責任者でありながらも、この場を楽しんでいる。だが、この屋敷の料理長である大平松のことを考えると、イライラしてならない。

彼は今夜、留守にしている。どこにいるのかというと、主と『イチゴヨーグルトの君』のところだ。

大平松は主から直々に頼まれ、おふたりが住まうワンルームでイブのデザイナーを作っているのだ。

出かける前に、大平松はわざわざ善一に「では、これから行ってきますね」とにやにやしながら声をかけてきた。善一は大平松の上司。だから、彼が善一に一声かけて行くのは筋なのだが……

善一はあの得意げなにやにや笑いを思い出し、腹を立てた。

主から何度もイチゴヨーグルトの注文を受けた大平松は、爽様が気に入って食べているのだと勘違いしていた。『夢のような味』という感想も、爽様のものだと思ひ込んでいたくせに。

私など、すぐに『イチゴヨーグルトの君』の存在に気づいたというのに……

……今頃、お会いしているのだろ。そして『このお料理、とても美味しいですわ、大平松さん』などと、舞い上がってしまうほどの言葉をいただいて……

くそおつ！面白くない。

私だっておふたりのお世話をしたかった。『イチゴヨーグルトの君』とお会いしたかった。

「ちよつと吉田」

聞きなれた声に、善一はハツとして顔を上げた。

「これは、大奥様。何かございましたか？」

「何かございましたかですって。ありませんほどあるじゃないの」

ああ、また不満を言うために、声をかけてきたのか。

いくぶんアルコールが過ぎていられるかもしれない。そろそろお休みになるように促したほうがよさそうだ。

「爽はまだなの？ いったいいつになったら、あのほんくらは帰ってくるの？」

我が主をほんくら呼ばわりとは……

爽様の祖母であられる羽歌乃様ときたら、たまにとんでもない暴言をお吐きになるから困る。

だが、大奥様には腹心の部下である坂北千佳子がついているから、彼女に任せておけば大丈夫だ。

今宵、爽様がお帰りにならないことを、坂北は知っている。大奥様がいつもよりたくさんアルコールを口になさっているのは、坂北の考えあつてのことなのかもしれない。

まったく、有能な女性だ。ここにあやつを連れてこなかったことも、称賛に値する。

あやつとは、大奥様の屋敷を仕切っている執事頭のことだ。何かというと私を目の仇に

するので、うつつうしくして仕方がない。

大奥様はさんざん主を罵ったあと、坂北とともに屋敷をあとにした。

羨ましくて仕方がない大平松が戻ってきたのは、夜の九時半ごろだった。

帰宅の報告をするため、彼は善一のもとにやってきた。

聞きたくもないのに……

「吉田さん、こんなところにおいででしたか。ただいま戻りましたよ」

大平松はたいそうご機嫌で、どれだけ楽しい時間を過ごしてきたのかがありありと窺える。

善一は、さっそく話をしようとする大平松の口を塞ぎ、自分の部屋に引つ張って行った。主と『イチゴヨーグルトの君』の関係を知っているのは、限られた者だけだ。だからみなの前でベラベラとしゃべられては困る。

ソファにドカッと座った大平松は、まずその座り心地のよさを無駄に絶賛した。彼の機嫌のよさを喜ぶべきか……つまりそれが意味するところは、主と『イチゴヨーグルトの君』のイブのディナーは大成功だったということなのだから。

大平松のために、彼の好きなアップルティーを、自分用にストレートティーを淹れて、善一は彼の前に腰かけた。

「もうしゃべってもいいですかね？」

口を開くなという善一の言いつけを律儀に守っていた大平松が、おずおずと尋ねてくる。

こういうところ、単純でかわいい奴ではある。

「ああ、もういいぞ。好きなだけ話すといい」

大平松は、ばあつと明るい表情になった。だが、ニタニタと笑い続けるばかりで一向に話し始めない。

「大平松、にやついてばかりいないで、早く報告しろ」

「あっ？ すんません。思い出すだけで楽しくて」

イラッとした。その首に手が伸びていきそうになる。

「イブのディナーは、滞りなく終えたのだな？」

「もちろんですよ。もう美味しい美味しいと食べてくださって……。驚きましたよ、実に驚きました」

「驚いたって、いったい何に驚いたというんだ？」

「そりゃあ、もちろんお嬢様にですよ」

「イチゴヨーグルトの君」か……どのような女性だったのだろうか？ 知りたい！

「お嬢様のどんどころに、お前は驚いたんだ？」

「うーん。つまりですね。爽様の奥方になる女性はどうなんひとなのだろうと、常日頃から、私は想像しておったんですが……」

それは自分も同じだ。どんな方だろうと、いつも思い描いていた。

「想像を超えたお方でしたよ」

ほおっ！

大平松の言葉に思わず息を呑む。

そうか……やはりな。

主が見初めた女性は、我々の想像を超えるほどの素晴らしいお方なのか……さすが爽様。

「私のことをとても気に入ってくださって、イチゴヨーグルトについては、もう何度も何度も褒めたたえてくださったんですよ」

「それで……どんな方だった？」

「えっ？　ですから、想像を超えた……」

「見た目だ、見た目」

大平松の愚鈍ぐんたさに苛立ち、つい口調がきつくなってしまふ。

「ああ、見た目ですか……ええと……目が大きかったですよ。くるんとね、こんな感じ」
大平松は親指と人差し指で丸を作り、それを目に当てながら言う。こんな感じも何も、

それでは具体的なイメージなどできるわけではない。

「それで？」

苛立ちを抑えて、さらに聞く。

「髪の毛はこのくらいでしたね」

大平松は自分の肩より少し下に手を当てて言う。どうやらセミロングらしい。

「それで？」

「えーと、髪はくるくるっとしてて、目玉もくるくるっとしてて、やはり一言でいえば、想像を超えた女性だったんですよ」

善一は頭が痛くなってきた。

『イチゴヨーグルトの君』がまるで想像できない。

「大平松、よくわかった。ありがとう。そろそろパーティーに戻るとしよう。疲れているところすまないが、厨房ちゆうぼうに行つて指揮しきをとってくれ」

「お任せ下さい。私はまだまだ、いくらでも動けますぞ」

張り切る大平松とは対照的に、善一は身体を引きずるようにして、パーティー会場に戻つたのだった。

ああ、疲れた……

こうして、なんだかんだありつつもクリスマスイブの夜は更けていった。

1 あからさまなサンタの正体（母）

うん？

頬に何かが触れ、鈴木母はほんのちよつぱり臉を開けた。

なんだあ？ 赤い物が見えるぞ。

ぎゅつと眉を寄せ、ほおつとして意識をはっきりさせながら、母は赤いものの正体を確かめようと手を伸ばした。

「Merry Christmas」

突然、耳元で囁かれ、母は驚いて振り返った。

ベッドに横になっている店長さんが、母を見つめて微笑んでいた。

このひとは藤原爽とおつしやり、母が働かせてもらっている宝飾店の店長さんだ。つまり、母の上司さん。

「店長さん、おはようです」

同じベッドで寝ているが、このおひとは母の恋人ってわけじゃない。実は色々あって、店長さんは母のワンルームで寝泊まりしているだけ。

もう起きなきゃならない時間かな？

そう思って窓に目を向けると、カーテンの隙間から朝日が差し込んでいる。いい天気になりそうだ。

そっか……今日はクリスマスなんだよね。

気づいた途端、なんだか急にウキウキしてきた。

「メリークリスマスです」

笑顔で言う、藤原は先ほど母が目にした赤い物体を掴んで取り上げる。

綺麗にラッピングされた箱だ。サンタのイラストがついた赤い包装紙に、金色のリボンが結ばれている。

「こ、これって？」

「……クリスマスプレゼントのようですね」

藤原は少し考えた素振りをして言う。

「これ、店長さんから母に？」

母は期待に胸を膨らませて尋ねた。

「いいえ」

あっさり否定され、母は戸惑った。

「だって、ここには店長さん以外にいませんよ」

「そんなことはありません。これは鈴木さんへの、サンタクロースの贈り物でしょう」
 苺は一瞬ポカンとした。

「サンタクロース!？」

素っ頓狂に叫んだ苺は、次の瞬間、声を上げて笑った。

「サンタさんは、実際にはプレゼントなんてくれませんよお」

「おや、意外ですね。鈴木さんがサンタクロースなんていないとおっしゃるとは……」

「いないとは言ってもませんよ。けど、こんな風に現物のプレゼントはくれないってことですよ。だからこれは、店長さんが……」

「消えてしまいますよ」

声を潜めて忠告され、苺は驚いて藤原を見つめた。

「き、消える?」

「ええ。サンタクロースの贈り物を否定すると、贈り物は消えてしまうんです。それではサンタクロースをひどく悲しませますよ」

真剣な眼差しで言う藤原に、苺は顔をしかめる。

藤原から受け取った箱を見つめ、反論しようかと思っただが、ちよつと考えてからやめた。

こいつを用意したのは、もちろん店長さんだ。店長さんでしかあり得ない。けど店長さんは、こいつはサンタクロースからのプレゼントだと言い張りたらしい。

ならば、ここはひとつ、乗っかってあげようか？

ちよいと面白いし……

「消えたらもつたないから……苺、サンタさんの贈り物もらつときます」

藤原は嬉しそうに微笑んだ。その表情に苺まで嬉しくなる。

「開けてみては?」

促され、上半身を起こす。そして、ベッドに横になつたままにいる藤原の隣で、ラッピングを解いた。

わくわくしながら箱を開けた苺だったが、中身を見た途端、笑みを消した。

ポシエツトだった。藤原の両手を横に並べたくらいの、大きめのポシエツト。

だが、どう見てもお子様用だ。

苺は藤原にさつと視線を向けた。案の定、藤原は、箱の中身を確認した苺を見て、口端っこをヒクヒクさせている。

その表情にむつとしつつ、苺は箱の中ものを掴み出した。

「いいですね。さすがサンタクロースです。とてもセンスがいい」

サンタクロースを手放して称賛するその態度、あまりにも白々しい。

「鈴木さん、お似合いですよ」

お似合いという言葉に、苺は顔をしかめた。

「言っときますけど……苺、イチゴならなんでも好きってわけじゃないですよ」
 子ども用であつても安っぽい作りではない。ふわふわのボアは触り心地がいいし、大きなキラキラのビーズで形作られたイチゴが二個重なって並んでいて、可愛いことは可愛いのだが……

「ポシエットを開けてみては？」

何気なさそうに勧める藤原を、苺はじろりと見た。

「中に入つてるとかですか？」

「いえ。そんなことは知りませんが……膨らんでいるようだから、何か入っているのかなと思つたのですよ」

なーが、そんなことは知りませんが……だ。

苺は、ポシエットの外側にポンポンと触れて確かめてみた。

やはり、何か入っているようだが……

どうせまた、イチゴ関係のものが入っているに違いないよ。しかも、ポシエットと同様にお子様チックなアイテムが……

「苺、こんなの下げて歩きませんよ」

きっぱり宣言すると、店長さんはくいつと眉を上げ、身を起こした。

「どうしてですか？ サンタからの贈り物なのに……」

「だつてこれ、子どもっぽすぎますよ。言っときますけど、苺はこれでもハタチなんですよ」

「お似合いだと思つたのですが……気に入らないのであれば……仕方ありませんね」

藤原はひどく気落ちした様子で、苺の手からポシエットを取りあげて、ベッドを降りた。そして、そのまま部屋を出ていこうとする。

その背中には、『がっかり』という文字が張り付いているように見えて、苺は罪恶感に駆られた。

「あ、あの、店長さん？」

「なんででしょうか？」

さつと振り返つた藤原の瞳には期待の光が宿っている。

苺は声をかけたことに後悔を覚えつつ、藤原の手の中のポシエットを指差した。

「それ、どうするんですか？」

なんだか藤原の作戦にはまってしまったようで悔しいけれど、しぶしぶ尋ねてみる。

「鈴木さんにいらないと言われては……サンタクロスに返すしかないでしょう」

いまだにサンタなどと言う藤原がおかしくて、苺はくくつと笑った。

あくまで、サンタからのプレゼントだということで貫き通したいようだ。

しかし、返すつたつて、どうやって返すつもりなんだか……

サンタさんと直接会えるのなら、苺も会わせてもらいたいよ。しかし、ここまで押し通されると、逆に愉快になってくるというものだ。藤原の冗談に、とことん乗っかってやろうかという気持ちになってくる。

「サンタさんをごっかりさせたくないし、苺、それもらつとくですよ」
「仕方なく？」

まあそうだけども……

苺は心の中でため息をつきつつ、ベッドを降りる。そして藤原からイチゴのポシエツトを取り上げ、首からかけた。

パジャマ姿にイチゴのポシエツト……

なんともマヌケな姿だ。

「とてもお似合いですよ」

褒められた苺は派手に嘖き出した。

藤原の声に微塵みじんも笑いを感ぜられなかったからだ。至極真剣で、それが逆に笑える。

苺はおどけてくるくる回り、最後に藤原に抱きついた。これで店長さんは、マヌケな苺のお仲間だ。

「サンタさん、ありがとう！」

藤原は、どういたしましてとも、私はサンタではありませんよとも言わず、苺を軽く

ハグして苦笑する。

「それでは、朝食を食べましょうか？」

「はい」

返事をした苺は、きゅつと眉を寄せた。

そういえば、昨夜……

苺は、昨日からこの部屋に置いてあるテーブルを見つめた。昨夜の豪華ディナーのために運び込まれたテーブル。いまその上は綺麗に片付いている。

夕べはほんと、ビックリ仰天させられたよ。ワンルームに戻ってきたら、見知らぬ男のひとに出迎えられてさ。思わず店長さんにしがみついた。傍目にはあのときの苺、ずいぶんと滑稽こっぴどだっただろう。

その男のひとは、店長さん家の料理長さんで、大平松さんというらしい。そして彼こそがあの夢のような味がする、豪華版のイチゴヨーグルトを作ってくれていたひとだった。

大きなテーブルの上にはご馳走ちそうがいっぱい並んでいて、すべてが魔法みたいだったよ。

苺は首を傾げた。

そういえば……昨夜の最後のほうの記憶があやふやだ。

えっと……店長さんとデザートを食べて……それから……？

かくんかくんと頭を揺らしながらも、歯を磨いた記憶はある、店長さんとソファに座っておしゃべりしたような気もするのだが……

「テーブルの上のもの、店長さんが片付けてくれたんですよ。苺、覚えがないんですけど……」

「ケーキの中に入っていたブランデーのせいで、酔ってしまわれたようでしたね」

「また迷惑かけちゃったみたいで……すみません」

「そんなことは気にしないでください」

苺の頭のとっぺんを、藤原は軽く撫でる。

「さあ、朝食の準備をしましょう」

苺は頷き、藤原と一緒に朝食の支度をととのえて、昨夜の立派なテーブルの席についた。いつもと違って、藤原との距離があり、変な感じだ。

「遠いですね」

大平松が用意しておいてくれた朝食を食べながら、苺は藤原に声をかけた。

「そうですね。私たちの生活にはそぐわない。今日中に、引き取りに来てもらいましょう」

「料理長さんが来るんですか？」

またあの楽しい料理長さんに会えるのかと思って苺が尋ねると、藤原は首を横に振る。

「大平松は来ないでしょう」

「なーんだ」

「どのみち、我々はこれからすぐに支度をして出かけるのですから、大平松が来ても会えませんよ」

「えっ？ これからすぐ？ 店長さん、『ちょっとしたところに出かける』のは午後からって言ってなかったですか？」

「以前お願いした、鈴木さんにしかできない仕事をしていただくのは午後からですが、そのための準備が色々とありますからね」

「準備って、どんなですか？」

「色々……と言いましたよ」

「どうしてちゃんと教えてくれないんですか？」

「午後になればわかりますよ」

苺はむっつとして藤原を見つめる。

「午後のことじゃなくて、まずはこれからのことを聞いてるんですよ。午前中、どんな準備をするんですか？」

絶対、教えてもらおうぞという思いを込めて問う。

藤原は顔色ひとつ変えずに苺を見つめていたが、しばらくすると、おもむろに口を開いた。

「鈴木さん」

「な、なんですか？」

真顔の藤原にちよつとビビってしまい、思わず身構える。

「開けないんですか？」

藤原の視線は、苺の腰の辺りに向けられている。

苺は自分の腰に目を向け、顔をしかめた。何かと思えば……

それにしても、イチゴのポシエットをぶら下げっぱなしにしていたこと、すっかり忘れていた……

「開けませんよ」

苺は反抗的に言い放った。

「なぜ？」

「なぜじゃないんですよ。苺の質問はどうなったんですか？」

「宙ぶらりん、でしょうか？」

「はあっ？」

呆れて声を張り上げた苺を見て、藤原はくすくす笑い出した。

まったくもおつ。適当にごまかすつもりなんだろうけど、今日の苺は、そう簡単に引き下がらないんだからな。

「今日、いったい何があつて、苺は何をすればいいんですか？」

「午後になればわかると申し上げましたよ」

「どうして教えてくれないんですか？ 苺、すつごく気になりますよ」

気になるだけではない、不安にもなる。この店長さんは、そんじょそこいらのひとつはわけが違う。何をやらされるかわかったもんじゃやない。宝飾店の店員だつてのに、メイドさんのような格好をさせられるわ、サンタクローズのコスチュームを着せられるわ……

店長さんに懇願こんがんされて、よくわからないまま手伝う約束をしてしまったけど……それがどんなものなのか、なかなか口を割ろうとしないことからして、絶対にとんでもないことに決まつてる。

けど、その用事が終わつたら、夜は苺の家でクリスマスパーティーだ。参加者は、苺の父と母、そして兄の健太と兄のお嫁さんの真美まみさん。それと、近所に住む幼馴染の二にノ宮みや剛たけし。

そして今年は店長さんも一緒。きつと賑やかなパーティーになるぞお。

真美さん、パーティーには欠かせないクラッカーとノンアルコールのシャンパン、用意ちせうしてくれたらどうか？

ご馳走ちせうを食べて、プレゼントの交換会をして……

「あああーっ!!」

絶叫した苺は、椅子から飛び上がって固まった。

「いったい、どうなさったんです?」

「プ、プレゼント……」

「プレゼント?」

「クリスマスですよ。……す、すっかり忘れてて……ど、ど、どうしよう、ひとつも買っていないんです」

「大丈夫ですよ。これから買いに行けばいい」

「で、でも……すぐに支度して出かけるって……さっき」

「そちらはなんとでもなりますよ」

「いいんですか?」

「ええ」

落ち着き払った藤原の返事に、苺は安堵してその場にへたりこんだ。

よかったーっ。

「ここ数日忙しかったですからね」

確かに忙しかったんだけど……

「でも、店長さんは、ちゃんと苺に用意してくれてたですよ」

苺は、イチゴポシエットを両手で掴んで藤原に見せた。

「それは……」

あつ、間違えた。

「店長さんじゃなくて、サンタさんでしたね」

そう言うと、藤原は目を細めて首を傾げる。そして再び、「開けてみないんですか?」
と言う。

「中に入ってるのも、どうせイチゴグッズなんですよ?」

「さあどうでしょう?」

とことんシラを切り続ける藤原に根負けして、苺はポシエットを開けてみた。

ポシエットの中に入っていたのは、予想通りのものだった。

イチゴ柄のハンカチ。イチゴ柄のニーハイソックス。そして、イチゴの形をしたミトンの手袋。

さらに、イチゴの髪飾りとか小物もゴロゴロと出てくる。

「こんなのよく探してきましたよね……」

「さすがサンタクロースです。まったくもって、感心してしまいますね」

よく言うよ……

真顔でしらばっくれる藤原に、苺は呆れ返った。

2 おいてけぼり（爽）

クリスマスの贈り物を買って忘れていたとはな……まったく母らしい。洗面所で髪を整えながら、爽はくすりと笑った。

パジャマにイチゴポシエットを下げていた母を思い浮かべると、どうにも笑いが込み上げてくる。

これからプレゼントを買いに行くことになり、予定を変更しなければならなくなったが、元々時間には余裕があったため、さほど不都合はない。

なにより、彼女と買い物に行くのは面白そうだ。

クリスマスプレゼントか……両親と兄、そして兄嫁にも買うのだろうか。……あとは誰に？

……たぶん、彼女の幼馴染である、二ノ宮剛にも買うのだろうか。

爽は顔をしかめた。そして、洗面所に飾られたペンギンの置物を、思わず睨みつける。この置物は、母が二ノ宮から土産としてもらったものらしい。その事実を知ってから、このペンギンが憎らしく思えてならない。まあ、自分でも大人げないと思うのだが……

クリスマスパーティーには、二ノ宮も毎年参加しているという。

爽は昨夜のことを思い出してにやりと笑った。

鈴木家のクリスマスパーティーは、例年イブに行なっていたそうだが、今年は母が仕事だったため、二十五日の今日に変更してもらった。そして昨日は仕事を終えたあと、母は爽と過ごした。

ふたりだけで……

二ノ宮より一歩リードしたようで、気分がいい。

これまで母を独占していたようだが、今後はそうはいかないぞ。

母の兄である健太によれば、二ノ宮と彼女は特別な間柄で、爽が注意すべき存在らしい。その二ノ宮と今夜会うのだ。いったいどんな男なのだろうか？

まだ見ぬ男に対して、闘争心が燃え上がる。

「店長さん、母、もう用意できましたよお」

ペンギンを睨んでいた爽は、突然洗面所にやって来た母に驚いて振り返った。

もう、支度を終えたのか？

「なんだ、店長さん、まだ支度できてないですか？」

母は、爽が手にしている櫛を見て言う。

「いえ。もう終わりましたよ」

そう答えたものの、苺の全身をチェックして、眉をひそめそうになる。すでに何度も目にしたことのあるセーターとジーンズ。顔はノーメイクで、髪ときたら……

「そうですか。そいじゃ、急いで行きましょう」

早くプレゼントを買わなければと焦っているのか、苺は今にもすつ飛んで行きそうだ。爽はさつと腕を伸ばし、苺の襟首を掴んだ。

首が絞まったのか、苺は「ぐへっ」とおかしな声を発する。

「ちよつと待ちなさい」

「な、なんなんですか？ 苦しいですよ」

文句を言う苺をスルーし、爽は呆れながら彼女の頭に触れた。

「こんな頭で出かけるおつもりですか？」

「はい？ 頭？」

苺は自分の頭に手を当てて、何がなんだかわからない、という風に首を傾げる。

「髪がぐしゃぐしゃじゃありませんか」

「えーっ！ そんなに言うほどひどくないですよ。ほら、こんな風にちゃんと手で整えただからです」

両手を頭に当て、十本の指で髪を梳いてみせる。

「まるきり整っていませんよ」

まったく手櫛くらいで、この乱れた髪がきれいになるはずがない。

「こつちにいらっしやい」

爽は苺の腕を引っ張り、鏡の前に立たせた。

「で、でも、時間がなくなるですよ」

焦る苺の頭を両手で挟み、力任せに鏡に向かわせると、彼女はその動きに合わせて、「ぎぎっ」と効果音をつける。

「く、首が折れるですよ」

「これくらいで、ひとの首は折れたりはしませんよ。いいから、前を向いていなさい」
苺はしぶしぶ大人しくなり、爽は彼女の髪を櫛で梳く。

「こうして櫛を使うだけで、それなりに整うのに……」

「それなりに……ね」

揚げ足を取るように、苺が言う。

「くせ毛なので、櫛を使っても毛先が少々はねるのは仕方がないでしょう」

「まあ、いいですよ。店長さんが梳いてくれると、苺の根性のねじ曲がつたくせ毛のやつも、それなりに大人しくなるみたいだし」

苺は鏡に映った自分を見つめて言う。

母の言葉でいい気分になった爽だが……一つ気になることが出てきた。

「鈴木さん。こんな風に、誰かに髪を梳すってもらったことはあるんですか？」

「そりゃあ、あるですよ」

「誰に？ お母様ですか？」

「お母さんは小さい頃だけです。高校とか専門学校では、友達がよくやってくれたんです」

「友達ですか」

その友達の括くりに、二ノ宮が入っていたりは……？

「店長さんは、誰かにやってもらったことはあるんですか？」

母から逆に問われて爽は面食らった。

「は？ 私……ですか？」

「はい。髪を他人ひとにいじってもらうのって凄く気持ちいいし……今度はお返しに、母が店長さんの髪を梳すいてあげるですよ」

母に髪をいじってもらっている自分を想像し、それも面白いかもしれないと思う。

「では、次の機会にでも、お願いしましょうか」

「いいですよ。それじゃ、店長さん、もう行くですよ」

母は号令をかけながら、爽の腕を両手で掴つかみ、引っ張って行く。

洗面所をあとにしながら、爽はペンギンに勝ち誇った目を向けてしまい、大人げない自分に頬を染めた。

母と一緒にエレベーターに乗り込み、爽は考え込んだ。

クリスマスの贈り物によさそうなものを売っている店をいくつか知っているし、爽の経営している店ならば、価格も安くできる。店を見た母の反応や、店に対する感想などを聞かせてもらえば、今後の参考になりそうだ。

「どこの店に行くか、決めていらっしゃいますか？ なんですしたら、私の……」

申し出ている途中で、母は手を横に振って爽の言葉をさえぎる。

「ショッピングセンターでいいですよ。あそこならなんでもあるから、みんなへの贈り物を買えます」

話の腰を折られてしまい、爽は顔をしかめた。

なんだ、ショッピングセンターに行くのか。

自分の経営している店がショッピングセンターに負けた気がして、少々面白くない。

まあ、まだ申し出てはいなかったわけだが……どのみち、母はショッピングセンターを選んだらう。

わだかまりは残っていたが、爽は黙って母に頷いた。そして、頭の中で立てていた計

画をすべて破棄した。

ショッピングセンターに到着し、爽は従業員用の駐車場でなく、一般客用の駐車場に車を停めた。開店したばかりだが、駐車場はそれなりに埋まっている。

「鈴木さん、まずはどなたへの贈り物を買いますか？」

館内に入りながら、爽は母に尋ねた。

「そうですねえ。まずはお父さんとお兄ちゃんのを買います。もう買うものは決めてるんで」

「そうですね。お父様には……そうだ、鈴木さん」

「なんですか？」

「お父様のお名前はなんとおっしゃるのですか？」

母親の名前は、母の父親が名を呼んでいるのを聞いたから知っている。確か節子だったはずだ。

「父の名前ですか。宏っていうですよ」

「宏さんですか。お母様は節子さんでしたよね」

「ええっ、店長さん、なんで母の母の名前を知ってるのですか？」

「お父様が口にされたのを聞いたのですよ」

「それって、いつですか？」

「貴女が捻挫したとき……。まあ、そんなことはいい。それで、お父様には何をかうんです？」

「ベルトです。ちょっと凝ってセンスのいいのがいいなあって、思ってるですよ」

売り場にずらりと並んでいるベルトを見て、母は悩み始めた。あらかじめ、値段を設定していたようなのだが、ランクが上のものを目にして、迷いが生じたらしい。

「鈴木さん」

「はい、なんですか？」

商品を見つめたまま、母は上の空で返事をする。

「鈴木さんのお父様ならば、これなどとてもお似合いだと思えますよ」

母はくるりとこちらを向き、爽の手にしている品を見る。

「そう思います？ これより？」

「ええ。私は、このほうがいいと思いますが」

爽が言うと、母は迷いを捨てて、アドバイスを聞き入れた。健太への贈り物もすぐに決まった。

「そいじゃ、お次は母と真美さんのを」

「ええ。おふたりには何を贈るのですか？」

「真美さんには将来役立つグッズにしようかと思ってるんです」
 将来役立つグッズ？

「それはどんなものですか？」

「ベビーのいるママさんに最適なバッグですよ。んで、とっても可愛いやつ」

「ああ、それはいいですね。では売り場に行きましようか」

鞆専門店を見てみたが、苺のお眼鏡に適う品は置いていなかった。そのあと、別の鞆専門店も全部回ってみたが、無駄に終わった。

「店長さん、あちこち回ったのに、決められなくてごめんなさい。予定もあるのに……そっちは、大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫ですよ。予定はすべて午後に戻すことにしましたから。鈴木さんは、焦らずプレゼントを探してください。真美さんに喜んでいただける品を……そうだ、鈴木さん」

「なんですか？」

「まずは、お母様へのプレゼントを選びませんか？ それと、真美さんへの贈り物ですが、バッグ以外のものも探してみませんか？ もしかすると、もっと他にいいものが見つかるかもしれません」

「うん、そうですね。ママさん用のバッグにこだわることないですよ」

苺は母親の節子へは、低周波治療器をプレゼントすると決めていた。様々あるデザインの中から苺が母に選んだのは、コンパクトで見た目も可愛いピンク色のものだった。

こんなものもあるのだな。羽歌乃さんも、こういうものを喜ぶかもしれないな。それに吉田も……

茶色の渋い色をした低周波治療器を手にして思案する。

もちろん、すでにふたりには準備してあるのだが……

少し悩み、爽は買うことにした。

「店長さんも、これ買うんですか？」

「ええ。喜んでくれそうなので」

「でしょう。なんか、凄く効き目があるらしいんですよ。お母さん、前から欲しいって言ってたんです」

「それならば、喜んでくださるでしょう」

「はい！」

苺は元気よく返事をし、にこにここと笑う。

いいな。苺の笑顔は、なんとも心が温まる。そして、このエクボ……

爽は、人差し指で、苺の可愛いエクボをつついた。

「もおっ、店長さんってば……」

「それより、真美さんへの贈り物はどうしますか？」

「そ、そうでした。うーん、どうしよう……?」

悩みながら周囲を見回していた苺は、何か思いついたのか急に暗れやかな顔になった。

「そうだ。ベビー用品のお店を、まだ回ってなかったですよ」

「ベビー用品の?」

「はい。ママさんの必需品も置いてあるはずです」

ふたりはベビー用品の専門店に行ってみた。すると……

「わあっ、あるある」

苺は歓声を上げた。どうやら、思い描いていたバッグに出会えたらしい。

逆に品揃えが豊富すぎてまた少々悩んでいたが、なんとか無事に買った。

「これで終わりですか?」

爽は試すように問いかけた。まだ終わりではないのはわかっているの質問だった。

幼馴染の二ノ宮への贈り物がまだだ。

「店長さん、苺、ちょっと用事があるんで……」

落ち着かない様子で苺が言い出し、爽は眉を寄せた。

黙っていると、「二十分くらいしたら、どこかで待ち合わせってことでお願いします」

と言う。

もちろん嫌だとは言えない。

「では、その荷物は私が預かりましょう。先に車に運んでおきますよ」

「そうですね。そうしてもらえたら助かるです。そいじゃ、お願いします」

荷物を受け取り、落ち合う場所を決めると、苺はあつという間に爽の前から姿を消した。

ひとりになった爽は、苛立つてならなかった。

別にどうということもない。好きにプレゼントを選んでくればいい。そうは思うもの

の、イライラは増すばかりだ。

自分と別れて、ひとりで二ノ宮のためのプレゼントを選びたいのは、やはり彼に対して

特別な感情を持っているからなのか?

おいてけぼりにされた爽はやもやしつつも、駐車場を指して歩き出した。

三十分か……荷物を車に置いたら、時間つぶしにショッピングセンターの中をあちこ

ち見て回ってみようか。

3 スイッチ誤使用 〔苺〕

えーっと、手袋手袋……

苺はシヨッピングセンターの中を駆け回った。

剛へのプレゼントは、手袋の予定だ。手に馴染んで温かいやつがいい。

おっ、ここにありそうだぞ。手袋がいっぱいぶら下がっている。三十分しか時間がないから、ちゃっちゃと買わないと……あと仲のいい友達にも買いたいし……もちろん、店長さんへのプレゼントも買わなきゃならない。それに、藍原要さんと岡島怜さんにも、お世話になっているのだから、ふたりが喜びそうなものをあげたい。なんせおふたりは、苺の職場の先輩さんなんだもんねえ。

剛への贈り物である手袋は革の物にした。ちよつと高かったけど、あいつはバイクに乗るから革の物がうってつけだろう。友達にはアクセサリーを選んだ。ラッピングを頼んだあと、次は藍原と岡島のプレゼントをゲットするためにひた走る。

それにしても、いまのアクセサリーシヨップ、いいものがあつたな。

苺は走りながらにやついた。実は、サンタ店長さんが苺にくれたイチゴのポシェット

に匹敵するほどの、おかしなものを手に入れられたのだ。店長さんが嫌がりそうな、そして笑いとれる品……店長さんに負けてられるかってんだ。

手渡したときの藤原のおかしな表情を想像し、苺はぶくくつと笑った。

さーて、お次はここだあ。

苺は靴下専門店に飛び込んだ。藍原、岡島、それぞれに似合いそうなものを急いで選び、ラッピングをお願いして、店を飛び出す。

残り時間はもう十分くらいしかない。

苺お、急げーっ、急ぐんだーっ！

自分に発破をかけ、ラッピングを頼んでおいた商品を受け取るために、もう一度プレゼントを購入したお店を巡る。

「ハーツ、ハーツ」

息を切らせながら、苺は靴下専門店に戻り、藍原と岡島へのプレゼントを受け取った。「ありがとうございました」と、店員から丁寧に見送られて店を出たが、ちよつと顔が渋くなる。

急いでもらったからか、ラッピングの出来栄は、どれもみな、いま一步な感じだ。

もうちよつと、ここをこんな風にいじれば、もつと素敵になるのと思うものばかり。できることなら自分で包み直したいけど、もうそんなことをしている時間はない。だい

たいプレゼントを買うのを忘れていた苺が悪いんだもんね。ここはすっぱり諦めよう。

さあ、もう本当に時間が無いぞ。最終目的地までダッシュだあ。
苺はプレゼントの入った袋を抱え、気合を入れて駆け出した。目指すは自分が勤めている宝飾店だ。実は、店長さんへのメインのプレゼントはお仕事中に決めておいたのだ。アクセサリーショップで買ったのはイチゴポシェットのお返しの商品。

口やかましいところもあるし、曲者の店長さんだけど、彼の厳しい教育のおかげで、苺は宝石の知識を深められたし、他にも色んなことができるようになったのだ。ワンルームにもタダで住まわせてもらってるし……しかも暮らすのに必要なものがすべてついてるなんて、普通じゃありえない。そして何より、店長さんは苺を準社員として雇ってくれたのだ。もう感謝感謝だよ。

だけど、店長さんったら、あんな子どもっぽいものをプレゼントするなんてさあ。

実を言うと、出かけるとき、あのイチゴグッズを全部身につけるように言われるのではないかと思つて、かなり不安だった。冷や冷やしていたけれど強制されることはなく、苺は心の底からほっとした。

店長さん、ぜったい無理強いしてくると思つたのになあ。

ちよいと拍子抜けしたけど……よかつたよかつた。

「鈴木さん。おひとりですか？」

宝飾店にやって来た苺を見て、藍原はすぐに近づいてきた。

藍原さんつてば、苺と店長さんはセットだと思つているような発言だ。けど、おひとりですかと口にしたつてことは、店長さんはここに来ていないわけだな。よしっ。

「店長さんと、三十分……あ、あと五分だけ別行動なんです」

「五分だけ？」

意味がわからないでいるらしい藍原を手招きしつつ、苺は店の中を小走りで移動した。もう話をしていない時間はないのだ。

よしっ。狙っていた品はちゃんと残っている。すでに売れてしまっていたらどうしようかと思つていたからほっとした。

「あの、苺、これが欲しいんです」

「ネクタイピンですか？」

「はい。これ可愛いなって、ずっと思つてて」

このネクタイピン、王冠がついてるのだ。あの王様みたいに振る舞う店長さんに、びつたりのデザインだ。

しかも、値段もお手ごろ。

「もしか、爽様に？」

苺はにこっと笑い、「そう」と返した。
 藍原は苺の期待に応えて小さく噴き出すと、すぐにケースの中からネクタイピンを取り出し、苺をレジへと促す。

「七千円になります」

財布から一万円を抜き出そうとしていた苺は、驚いて「えっ！」と顔を上げた。

藍原は顔を近づけてきて、「社員割引があるんですよ」と言う。

「いや、社員割引……」

「そんなものが、あつたんですか？」

てことは、この店の品物、なんでも三割引になるの？

うひょーっ。苺、三千円も得しちゃったのか？

そう考えた途端、ちよいと後悔した。ここで全員のプレゼントを買えばよかったかも

しんない……

そんな業突く張りな考えをちらつかせながら、苺は支払いを終えた。

「ご自分でラッピングなさいますか？」

「いい、いいんですか？」

「ええ。お願いでしたら、私も助かりますので」

苺は大喜びでレジの中に入った。

すると藍原は、店内に入ってきたお客様に歩み寄っていく。

残り時間を確かめ、苺は顔をしかめた。

時間がない。だが、せっかくのプレゼントだ。適当なラッピングなどしたくない。

でも、残り時間は数分で……

待ち合わせ場所には、もう絶対間に合わないだろう。店長さんを待ちぼうけさせてしまふことになる。

慌てて、ラッピングの包装紙やらリボンやらを選んでいた苺の視界に、青いボタンが入った。

て、て、店長さんスイッチ！

これだよ、これっ！ いまこそ、これを押すチャンス！

こいつを押ししたら、店長さんが飛んでくるはず。店長さんは苺に待ちぼうけを食わせることなく、ここでふたりは再会できるというわけだ。

苺はわくわくしつつ、人差し指で青いボタンを押した。

音が何もしなくて、いまいち手応えに欠けるが……

ともかくこれで一安心と、苺はラッピングを始めた。

「おい」

ラッピングに集中していた苺は、聞き覚えのある声に、パッと顔を上げた。

「つ、剛。な、なんで？」

「お前の勤めてる店って、ここだったのか？」

店内を眺めながら、剛は呟く。

「なんだよこいつってば、突然現れて、ひとをびっくりさせてえ。」

「な、なんであんたがこんなとこにいるのよ？」

思わず怒鳴ると、剛は腕を組んで斜しやに構え、苺をクールに見据える。

「仮にも俺はお客だぞ。店員がそんな口きいていいのかよ」

苺はべーっと舌を突き出した。

「残念でした。今日、苺、お休みだもん」

「は？ 店にいるのにか？」

「ラッピングさせてもらってるだけだもん」

「それって仕事じゃないのかよ？」

「仕事じゃないって言ってるじゃん。この格好だって、どうみても普段着でしょ」

剛は苺のラフなジーンズ姿を見て、納得したようだった。

「それで？ 剛は何か買ってたってくれるの？」

「いや。店の前通ったら、お前がいたから、声かけただけ」

「なんだ。おじさんやおばさんに、ちゃんとクリスマスプレゼント買ったの？」

苺は偉そうな態度で剛に聞いた。

「お前な、今日はもうクリスマスだぞ。こんな当日になってプレゼントを買いに走る奴なんて、いねえだろ」

当日にプレゼントをかうのに奔走ほんそうした当の本人である苺は、自分が包み終えたプレゼントに思わず視線を貼り付けた。すると、剛がブツと噴いた。

「な、何よっ！」

「言う必要もないだろ？」

くっそおっ。バレバレだったか……

苺は顔を赤くして剛を睨みつけた。

「鈴木さん？」

藍原の声に、苺は慌てた。

し、しまった！

「す、すみません。店内で騒いじゃって……」

「いえ、こちらの方は、鈴木さんのお知り合いの方ですか？」

「そうなんです。もう連れて帰りますから」

そそくさとレジから出た苺は、藍原に頭を下げると、剛の腕を掴つかんだ。そしてそのまま店の外に引っ張っていったが、剛は藍原が気になるようで、何度も振り返っている。

「お前、もう帰るんなら一緒に帰るか？　なんだったら俺のバイクに乗せてやってもいいぞ」

剛らしい傲慢な口調に笑いながら、苺は首を横に振った。まあ、乗せてくれるってんならそのうち乗せてもらいたいけど……

「苺、これから予定があるんだ」

それがなくても、買い込んだ大量のプレゼントを抱えてこいつと一緒に帰れない。ひとつふたつどころか、全員分忘れてたなんてことがバレたら、どんだけ笑われるか。

「予定？」

「うん。なんか店長さんに頼まれちゃってね。バイクにはまた今度乗せてよ」

「……ふーん」

剛は含みのある声を発し、また藍原のほうを見る。苺も気になって藍原に視線を向けてしまった。藍原はレジの中にいて携帯を耳に当てている。仕事なのに携帯で話してるなんて珍しい。

「なんなの？」

「いや……お前の彼氏も……今夜のパーティーに来るのか？」

彼氏という言葉にちよつと固まる。

そ、そうでした。剛の誤解、まだといてないんだっけ。

もう本当のことを言うべきかな？

「う、うん。来るよ」

訂正しなきゃならないとわかっているし、家族の勘違いに便乗しただけとはいえ、やはりちよつと言いつづらう。

でも店長さんがパーティーに来るのは本当のことだもんね。

「似合っていないぞ」

剛がぼそりと呟いた。

「えっ？」

似合っていないって、何がだ？　この服のことじゃないよね？　剛、これまでに何度も苺がこれ着てるの見てるし……

「俺のほうが……」

「鈴木さん」

何か言いかけていた剛は、その呼びかけにハツとして言葉を止めてしまった。声のしたほうに苺が目を向けてみると、藍原がこちらに歩み寄ってきていた。

「はい？」

「レジのところにある青いボタンですが、もしや触りましたか？」

ボ、ボタン？　なんで、藍原さんがそのことを知って……

「ああ、はい。苺、約束した時間にもう間に合わないと思って、店長さんスイッチ押したんです」

「……押したんですか？」

藍原から疲れの滲んだ声で聞かれ、苺は気まぎれになった。

あれって、押しちゃいけないかったのか？ 一度、店長さんに押し御覧なさいと言われて、押したことがあったもんだから……

「あれで……店長さん呼べるかなあって、思ってる……」

「爽様から、何かといま電話が……」

「あ、あれ、苺専用じゃなかったんですか？」

「鈴木さん……」

呆れたような藍原の口調に、まずいことをしでかしたらしいと悟り、顔を歪めた。

どうやら、やってはならないことをしてしまっただけ。しかも、こんな情けないところを剛に目撃されてしまうなんて……

「鈴木さん」

自分の名を呼ぶ声に、苺はびくと身を震わせた。背後から聞こえたこの声の主は、藤原に違いない。苺はビビりながら振り返った。

「あ、あの」

苺は藤原へのプレゼントを持っていることを思い出し、慌てて背中隠した。

「買い物は終えたのですか？」

「は、はい」

「では行きましょうか」

そう言っ、藤原は苺を促すように背中手当てしてきた。

どうやらお咎めはないらしいとほっとし、苺は剛に向かって言った。

「それじゃ、剛、また今夜ね」

「俺……今日は行けない」

「えっ、なんで？ 来れないの？」

「ああ」

「鈴木さん、こちらの方は？」

藤原に聞かれ、苺は剛を紹介した。

「貴方が……。初めまして、藤原です」

藤原は、剛に手を差し出した。剛は一瞬ためらった様子を見せたものの、藤原の手を握る。

「どうも。二ノ宮です」

「お噂は彼女から聞いていますよ。貴方から彼女がいただいたペンギンの置物は、私も

とても気に入っています」

藤原の言葉に、一瞬間の顔が強張ったように見えたが、剛はなんの言葉も返さず、苺のほうに向き直った。

「じゃあな」

剛は手を上げ、すぐに背を向けて立ち去ってしまった。

4 むかつくけれど 爽

あれが二ノ宮剛か……

遠ざかっていく後ろ姿を、爽は複雑な思いで見つめた。

まさか、こんなところで会うとは……

想像していた男とはまったく違った。もつと……そう、もつと普通だろうと思っていた。こんなことを言っては苺に失礼かもしれないが、彼女に似合いの男だろうと……

美丈夫びじょうぶというのか……ずいぶんとモテるだろうに、なぜ苺なんだ。

内心で身勝手な不服を並べ立てていた爽は、自分を見つめている要に気づき、視線を向けた。

要は澄まして爽を見つめ返す。その意味深な眼差しに、どうにも苛立つ。信頼に足る部下なのだが……時々、思い切り首を絞め上げてやりたくなる。

店内をあちこち見て回ったあと、苺との待ち合わせ場所に向かっていたら、なぜか突然緊急のアラームが鳴った。このアラームは、羽歌乃がやって来たことを、爽に知らせるためのもの。レジのところ設置したボタンを押すと鳴る仕組みになっているのだが、今日は仕事休みで私は店にいないのだから、要や怜が鳴らすはずはない。爽は不思議に思って要に確認の電話をかけた。だが、客の対応でもしていたのか、要はなかなか出なかった。呼び出し音を聞きながら、待ち合わせの場所へ歩いていると、ようやく要が出たのだが……理由を尋ねたものの、なかなか釈然とせず……そうしたら、いま店に苺がいると言い出したのだ。しかも、知り合いらしい男性と一緒だと。さらに、『かなり親しい間柄のようで、いまもとても楽しそうに会話しておいでですよ』と付け加えた。

それを聞いた途端、必死になって走った自分を思い出し、なんとも苦いものが込み上げてくる。

自分の隣に立っている苺に、爽は視線を向けた。

二の宮の姿を見つめている彼女に苛つく。

爽は、彼女が手にしている袋に気づいた。これは、この店の包みだ。

苺ときたら、二ノ宮へのプレゼントを、こともあるうにここで買ったのか？

爽が袋を見ていることに気づいた苺は、慌てて隠そうとする。面白くない。やはり二ノ宮へのプレゼントなんだな。

いまいまさに歯ざしりしたくなる。苺はあの男に、いったいどんなものを選んだのだ？

要は知っているに違いない。すぐさま聞きたかったが、苺のいる前では口にできない。諦めた爽は苺に「行きましょう」と声をかけ、彼女の背中を押して促した。

けれど苺は、「ちょっと待ってください」と言う。

「苺、レジのところに荷物を置いてるんで……それと、ちょっとお手洗いにも行つてきたいんですけど」

その言葉に爽は快く領いた。その間に要に話を聞ける。

「行つてらっしゃい。そんなに焦らなくてもいいですよ」

苺は領き、小走りで駆けていく。

「ペンギンの置物ですか？」

不意を突くように要が言った。

爽は要を睨んだ。こいつとききたら、嫌なことを聞いてくる……

「それにしても驚きました。あんな強力なライバルがおいでとは……爽様、これはうかうかしてられませんね」

「要、少し口を慎め」

「私が口を慎んでは、爽様の張り合いがなくなると思いますが……」
確かにその通りだ。

「ふたりを見て、どう感じた？」

改めて問うと、要は黙り込んだ。そして、考え込んだ末に口を開く。

「正直に申し上げても？」

「ああ、聞かせてくれ」

「鈴木さんを思う気持ちは、爽様よりも、あの方のほうが強いと思えました」

反論できないし、反論するつもりもない。私が苺に抱いているこの気持ちは、恋とか愛とかいうものではなく、独占欲だ。褒められた感情ではない。だが、彼女を自分の側に置いておきたい。他の男になど絶対に渡したくない。

苺は面白い。私の人生をより楽しく、豊かにしてくれる。

「私も、ひとつ爽様にお聞きしたいことがあるのですが……よろしいでしょうか？」

経験上、こういうときの要の質問は聞かないほうがいいとわかっている。だが、気になる。

「言ってみろ」

「昨夜の、おふたりだけのパーティーはいかがでした？」

爽はその問いに眉を上げた。なんだそんなことか……

「もちろん楽しかったが」

「ですが……」

要は、そう言っただけで思案するように首を傾げる。

「ですが、なんだ？」

言いたいほどむやみに苛立ち、続きを促す。

「いえ……おふたりの関係を深められたご様子はありませんね」

爽は顔を強張らせた。

こ、こいつ……

しれっと、とんでもないことを口走った要は、スタッフルームに続くドアに視線を向けた。母が出てきたようだ。

「要、彼女は、ここで何を購入した？」

爽はレジのほうに小走りで向かっている母を注視しながら、早口で問いかけた。

「申し訳ありませんが、それはお教えできません」

「なぜだ？」

「なぜと言われても……」

「店長さん、お待たせしちゃってすみません」

要から聞き出す前に、母が戻ってきてしまった。彼女は両手にたくさん荷物を提げている。

「おや？ たった三十分しか時間がなかったのに、ずいぶんたくさん買ったのだな？」

二ノ宮へのプレゼントだけではなかったのか？

戸惑っていた爽は、自分に向けられている要の視線に気づいた。

これ以上ここに留まってもいいことはない。爽は何も言わずに母の荷物の半分を取り上げ、さっさと歩き出した。

「あっ、店長さん、ありがとうございます」

お礼を言いながら、母が嬉しそうについてくる。

下りのエスカレーターから降りたところで、爽は母に話しかけた。

「二ノ宮さんですが、先ほどお聞きしたところによると、今夜のパーティーには参加なさらないようですね？」

母の反応を窺う。

むかつくことに、母は残念そうに頷く。

「そうなんです。毎年来てたのに……急に日程を変更しちゃったから……もう予定があったのかもしれないです」

「二ノ宮さんが来ないとつまらない、ですか？」

苺は、うーんと考え込んだ。

「いつもいたのに、いないのは……やっぱり寂しいです」

正直だな……

そして私は、他の男のことを考えて寂しがっている彼女の首を絞めてやりたくない。

「でも、店長さんがいるですから……」

えっ？

思わず足を止めてしまった爽には気づかず、苺はスタスタと歩いていく。

まったく……こういう彼女には、むかつく。

けれど……

そうか……

緩みそうになる口元を引き締め、爽は苺のあとを追った。

5 完璧な変身 ー苺ー

ええーっ、またここですかあ？

連れてこられた建物を見つめて、思わず口から出そうになったその言葉を、苺はなん

とか呑み込んだ。

そういうえば、今日は月曜日……週に一度と決められてしまったエステの日じゃないか。世の中クリスマス一色だったし、苺も忙しかったもんですっかり忘れていた。

藤原は、前回みたいにお店の前で苺をポイ捨てることなく、駐車場に車を停め、苺と一緒に降りた。

「今日は、風のように去っていかないんですか？」

「風？」

面白がりながらそう言うと、藤原は首を傾げる。

「今日は他に用事を抱えていませんからね。さあ、すでに予約した時間を過ぎてしまっています。鈴木さん、行きますよ」

「はい」

エステの気分じゃない苺は、覇気のない返事をし、諦め気分で藤原についていった。

「藤原様。お待ちしております」

「遅れてすまない。それではよろしく頼む」

「はい」

そんなやりとりのあと、苺はスタッフに店の奥へと連れて行かれた。

すでに何度か体験したコースを一巡りした頃には、苺は藤原のチェックも怖くないほ

ど、ピッカピカに磨かれていた。いつもの部屋でガウンを着たまま化粧を終え、苺はほっと息をつきつつ、鏡に映る自分を見つめた。

今日はメイクの前に髪までいじられた。ずいぶんと派手な頭に仕上がっている。なんでこんな髪飾りまでつけたかなあ？

ピンクの大きな花を見つめて、ため息をつく。

そんなのつけなくていいですよと言えたらよかつたけど、スタッフさんは恐いくらい真剣だったから、とても口を挟めなかった。

クリスマスだから、特別サービスってやつかもしれない。

けどさ、今日の苺、ジーンズなんだよね。

この頭は、浮くよ。残念なくらい……浮く。

着てきた服に合った髪型にしてくればいいのに……こんな高級そうなエステに、ジーンズで来る客はいないってことなのかな？

テンションの下がった苺は、ガウンからジーンズ姿に着替えるためにロッカーに向かうとしたが、そこでソフトな制止を食らった。

「へっ、なんですか？」

「次は、こちらです」

苺は眉を寄せた。

こちら？

今日はまだ、なんかあるのか？

でも、これ以上、何を？

肌はつやつや、爪もピカピカ。頭はこんなに賑やかだし……

いぶかしく思いながら、苺はスタッフが促す部屋うながに入った。

大きなドレッサーが壁に設置してあり、部屋の中央には何も置かれていない。ここで何をするのかわからず、苺は唇を突き出してゆっくりその場で一回転しながら部屋全体を眺め回した。

「あー、ここは？」

「ガウンを」

スタッフは、そう言って手を差し出してきた。

脱いでガウンを渡せということらしいが、これを取られちゃ、苺はパンツ一丁のままけな姿になっちまう。

「だ、駄目ですよ」

苺の拒絶に、スタッフはきよとんとした。

いやいや、きよとんとしたいのはこっちのほうだから。